

ドイツアート Bar Creators@Kamogawa

Creators@Kamogawaは、日本とドイツのクリエイターが、Barのようなくつろいだ雰囲気の中でアートを語り合うイベントシリーズです。今回のテーマは、『アートに国籍は必要か?』。

コスモポリタニズム（世界市民主義）は、現実の政治の世界では利害相反する状況があり、実現しにくいものです。一方、文化芸術の分野では、外国滞在経験や異文化交流は創造的な刺激を与え、新しいことを生み出す原動力ともなり得ます。では、文化芸術面で「コスモポリタンたること」は可能でしょうか？ 今日身近になった国際文化交流は、文化的アイデンティティをかえて薄めてしまわないでしょうか？ 「多文化性」や「文化的アイデンティティ」とは、そもそも何を指し、時代に合ったそれらの関係性とはどのようなものなのでしょうか？

今年9月～12月までヴィラ鴨川に滞在するドイツの芸術家4人は、これまで数々の外国滞在を重ねてきました。世界的に活躍する舞台演出家・美術家 やなぎみわ氏と、日本の伝統芸能を支える邦楽家 重森三果氏とともに、現代の国際化社会に則した「文化的アイデンティティのあり方」について話し合います。

座談会の後は、館内のドイツカフェ「カフェ・ミュラー」にて、ドイツビールやおつまみを片手に交流をお楽しみください。



フィリップ・ブスマン Philip Bußmann (ビデオアーティスト、舞台装置家)

1969年生まれ。シュトゥットガルトで舞台装置・衣裳を学んだ後、ニューヨークの前衛劇団「ウースター・グループ」等でビデオ&グラフィックデザイナーとして8年間活動。以降、ドイツ内外の有名劇場をはじめ、ウィリアム・フォーサイスやサシャ・ヴァルツら振付家とのコラボなど、演劇・ダンスの舞台装置や舞台ビデオ製作で活躍する。シアターカンパニー「2+」主宰。京都滞在中は、芸者文化を例に伝統と現代の関係を考察し、インスタレーションを創作予定。
公式サイト www.philipbussmann.com



やなぎみわ Miwa Yanagi (舞台演出家、美術家)

京都市立芸術大学美術研究科修了。1990年代後半より写真や映像を中心に作品を発表。ドイツ・グッゲンハイム美術館、大阪国立国際美術館などで個展多数。2009年ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表。2010年より演劇公演を手がけ、大正期の新興芸術運動の揺籃を描いた『1924』三部作を上演。2013年『ゼロ・アワー 東京ローズ最後のテーブル』を初演、2015年北米ツアーを行った。2016年より台湾製の移動舞台車にて中上健次原作『白輪の翼』を上演予定。
公式サイト www.yanagimiwa.net



ライナー・コマース Rainer Komers (映画監督)

1944年生まれ。デュッセルドルフとエッセンで映画製作や写真を学んだ後、アラスカ、インド、日本、イエメン、ラトビア、モンタナなど世界各地で映画監督・作家として活動する。産業的・都会的美学を背景に人間と自然の相互依存関係を追及した映像作品を発表し、数々の賞を受賞。日本でもドキュメンタリー映画『神戸』(2006年)を撮影した。京都滞在中は、人に見捨てられた場所をテーマに短編映画を製作予定。
公式サイト <http://komersfilm.com>



重森 三果 Mika Shigemori (研進派家元 新内志賀、和楽アーティスト)

京都市生まれ。幼少期より江戸浄瑠璃新内節を研進派初代家元・新内志賀大掾及び新派家元・富士松菊三郎に師事。2012年研進派家元、並びに新内志賀の襲名を果たし、現在は一門の指導・育成に献身。本名の重森三果名義では、様々な文学をもとに脚色した作品や自ら書き下ろした楽曲を、新しい試みをもって精力的に発表。また数多くの映画・テレビ等に於いて邦楽指導、演奏出演するなど多岐に渡る活動を展開。2014年文化庁芸術祭音楽部門優秀賞受賞。
公式サイト www.k5.dion.ne.jp/~mika-s/



アナヒタ・ラズミ Anahita Razmi (美術家)

1981年生まれ。ワイマールとシュトゥットガルトでメディアアートや美術を学んだ後、文化的アイデンティティや西洋・東洋のステレオタイプなどをテーマにした作品を創作し、ドバイ、ハノーバー、テヘランでの個展をはじめ、数多くのグループ展で展示。エムダッシュ賞などを受賞。京都滞在中は、日本のイラン移民や祇園祭の山鉾装飾など、イランと日本が混じりあう文化を調査し、写真またはオブジェを創作予定。
公式サイト www.anahitarazmi.de



小崎 哲哉 Tetsuya Ozaki (司会、構成)

1955年東京生まれ。ウェブマガジン『REALTOKYO』『REALKYOTO』発行人兼編集長。CD-ROMブック『デジタル歌舞伎エンサイクロペディア』、写真集『百年の愚行』などを企画編集し、現代アート雑誌『ART IT』を創刊した。京都造形芸術大学大学院芸術研究センター客員研究員、同大学院、愛知県立芸術大学講師。あいちトリエンナーレ2013のパフォーミングアーツ統括プロデューサーを担当した。2014年冬、『続・百年の愚行』を刊行。



ケヴィン・フェネマン Kevin Vennemann (作家)

1977年生まれ。ケルン、ウィーン、ベルリン等でドイツ文学、アメリカ文学、歴史を学んだ後、2009年以降、作家、翻訳家としてニューヨークを中心に活動。『イエーデネフの近く』『マラ・コゴイ』『サンセット大通り』など自著小説のほか、イタリア人理論家フランコ・ベラルディなどの作品を独訳し発表。文学と美術の境界などをテーマにしたセミナー講師も務める。京都滞在中は、現代日本の住宅建築とその社会的条件についてエッセイを執筆予定。

交通のご案内
京阪電車 出町柳駅より 南へ徒歩8分
京阪電車 神宮丸太町駅より 北へ徒歩6分



主催・お問い合わせ
Goethe-Institut Villa Kamogawa
京都市左京区吉田河原町 19-3
(川端通り荒神橋上る)
TEL: 075-761-2188 (内線 31#)
info@villa-kamogawa.goethe.org
www.goethe.de/villa-kamogawa



館内のドイツカフェ『カフェ・ミュラー』も、ドイツビールや軽食などをご用意して、皆様のお越しをお待ちしています。

